要　旨

〈少女らしさ〉の言説空間

――雑誌『少女の友』における読者投稿欄の分析――

前川　弥生

本修士論文は、1908（明治41）～1955（昭和30）年に毎月発刊された少女雑誌『少女の友』（実業之日本社）の読者投稿欄（以下「投稿欄」）において〈少女らしさ〉が成立する過程を分析し、考察したものである。

日本の「少女」概念は高等女学校制度によって誕生し少女雑誌によって普及したというのが、先行研究の議論における共通認識である。そのため「少女」に関する研究をおこなううえで少女雑誌というメディアは大変重要な存在だといえるが、なかでも1910年代に業界トップクラスの売り上げを誇った『少女の友』は、他誌に比べて投稿欄に力を入れる方針をとっていた。この投稿欄は編集者と読者、あるいは読者同士による親密なコミュニケーションが継続的に実施された言説空間であり、そこには〈少女らしさ〉をめぐる当事者の意識が色濃く表出していると推測して分析に取り組んだ。

作業にあたっては全投稿を集合人格的に捉えるとともに、歴史学の領域で近年再注目されるエゴ・ドキュメント分析の視点を用いることにした。また分析対象とする期間は創刊時～1928（昭和3）年に設定した。戦時下のように外部権力の影響を受けて〈少女らしさ〉が変貌せざるをえない時代ではなく、戦時以前の投稿欄を扱うことで、そもそも投稿欄においてなぜ、そしてどのように〈少女らしさ〉が成立したのかを明らかにできると考えたためである。

投稿欄を実証的に分析した結果わかったのは、当事者の自意識が変化し、〈少女らしさ〉のなかに吸収されていく過程であった。具体的には、創刊当初の投稿欄において使用された主語はすべて「わたし」（一人称単数）であり、「少女」や〈少女らしさ〉、およびそれに類する言葉は登場しない。しかし、次第に「少女」集団や愛読者

集団の一員として自己を認識していると解釈できる投書が増加し、その後には「少女」の特性や条件に言及する投書が多く見られるようになった。つまり投稿欄において〈少女らしさ〉は初めから存在したのではなく、「わたし」が集団に所属する自己を発見し、その集団を意識し、やがて〈少女らしさ〉が成立したのだと考察できる。

さらに本研究では、以前『少女の友』を形容するために用いられた「美しさ」「清らかさ」といった表現がその数年後に〈少女らしさ〉の形容詞になっている現象にも注目し、当事者が『少女の友』という仮想人格を鏡像とすることで内発的にかつ集合人格的に〈少女らしさ〉という自画像を形成した可能性があることを指摘した。

上記考察の妥当性を検証することを目的として、集団内部において主体から無意識に機能する力について論じたミシェル・フーコーとピエール・ブルデューによる言説を参看した。彼らの社会学的な視点を借用することで、〈少女らしさ〉が当事者のアイデンティティ形成を支える「真理」となった一方で「少女」のあり方に「正常性」と「異常性」の観念をもたらす側面をもっていた点や、当事者が〈少女らしさ〉の優位性を確保するため大人や男性、〈少女らしくない〉「少女」を批判しながら差異化や卓越化を図っていた点にも論及した。つまり、投稿欄という言説空間における〈少女らしさ〉は強固な求心性と同時に排他性をも有した両義的性格のものであり、権力構造を無意識に内包したものであったといえるのである。